

## 日本気象学会1992年秋季大会（札幌）報告

1992年の日本気象学会秋季大会は、10月7日から9日まで、札幌市教育文化会館、及び、北海道厚生年金会館で行われた。実施状況は次の通りである。

研究発表会 284題（内ポスターセッション11題）

参加者 362名

シンポジウム 「都市の豪雪」 —ここまできた降雪の観測と予測—

参加者 200名

講師 村松照男（札幌管区気象台）

上田博（北海道大学理学部）

藤吉康志（名古屋大学水圏研究所）

浅井富男（東京大学海洋研究所）

二宮洸三（気象庁予報部）

懇親会 1992.10.7 北海道厚生年金会館

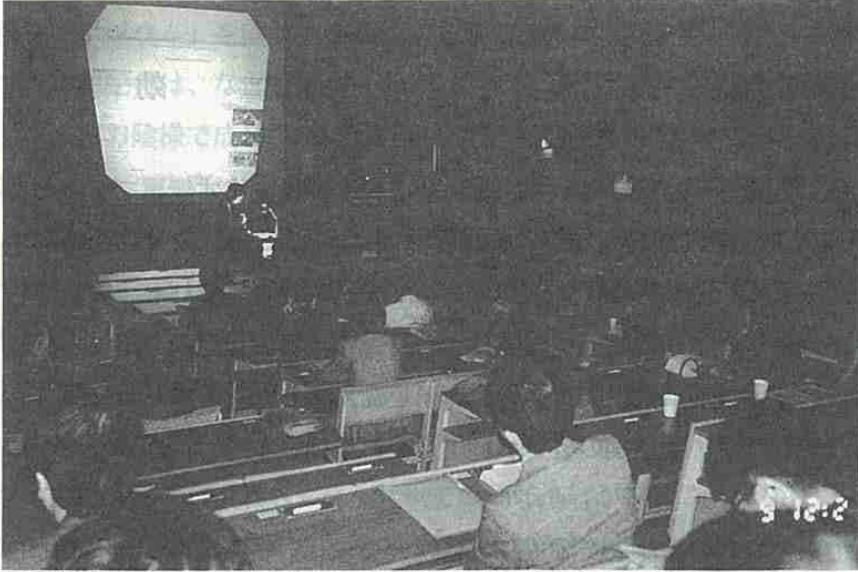
参加者 212名

4会場制になって2回目の大会であり、研究会も活発に行われ、内容豊かな大会であった。また、北海道支部の今勝義会員と川野浩会員に奨励賞が授与された。大会の成功は支部会員の協力の賜であった。ここに、次回の北海道地区での大会の成功のためにも、今回の大会をふり返って気付いたことについて会員の寄稿を掲載することにした。

尚、シンポジウムの内容については、「天気」40巻6号373～402ページに報告されています。



◀総会風景



日本気象学会1992年秋季大会

◀研究発表風景



◀ポスターセッション



◀懇親会風景

## 1992年日本気象学会秋季札幌大会

久保田 効

標記大会は、成功裡に挙行されました。大変喜ばしいことです。成功裡というのは、まず無事であったこと、4会場使用できて過去最高に近い研究発表数(284件、最高は289件)となったこと、決算に余裕が生じたこと、130名参加の懇親会に菊地教授提案の北海道の味覚を提供できたこと等です。これも、大会の約1年前に発足した大会準備委員会および気象学会本部の講演企画委員会の委員によるお世話のお陰だと感謝しています。大会準備委員会は、大会の約3カ月前に大会実行委員会と名を変えました。その時点で気象台職員の転勤による委員の入れ替えがありましたが、他機関の委員が、よくそれを補強してくださったことに感謝します。

シンポジウム“都市の豪雪—ここまで来た降雪の観測と予測—”は札幌大会らしい特色をもったものでした。主題はいかにも工学的に聞こえますが、実際の内容は副題のように、理学的なものでした。

雪のメソ量的予報は、交通手段の確保や除雪作業の準備のため、北海道にとって需要の高い予報です。札幌総合情報センターでは既に札幌市周辺の降雪予報をきめ細かく行っており、札幌管区気象台も平成4年12月から、各支庁を3分割した程度のこれまでより細かい地域を対象にして最大降雪予報を開始しました。シンポジウムや大会のメソ現象部門や雪部門、海洋・雪氷・大気相互作用部門で発表された研究は将来これらの業務的予報の精度向上を図る上で、陰に陽に役立つと思います。

このようなどちらかといえば高周波の気象現象とは対症的な低周波の気候変動や地球環境問題も北海道地方にとって重要なテーマです。道庁が行った世論調査では道民が多くの社会問題のうち、オゾン・温暖化・酸性雨などの地球環境問題に最大の関心を寄せていることが分かりました。

北海道における高周波の気象現象にしろ低周波の気候現象にしろ、ユーラシア大陸や日本海、オホーツク海からの影響が重要です。これらの把握には、ロシアとの共同研究やデータ交換が貢献します。幸い北大では「永久凍土日ロ共同研究」を発足させていて、今回も北大低温研に滞在中のロシア人研究者による融氷実験の発表がありました。ロシアの水理気象局とも自由な学会活動を通じて交流が出来ればロシアの観測データの事情など明白になるのではないかと期待されます。

札幌大会へのご協力有難うございました

澤田 可洋

気象学会全国大会が札幌で開かれる、おまえはシンポジウム担当である、と聞かされて昨年4月に赴任してきました。気象学会北海道支部理事をおおせつかったうえ、大会実行委員会の中では懇親会、報道対応なる役もいただきました。役職上とは言え、これまで地震、火山分野の仕事が長かった私には、これは大変という思いと、エイ何とかなるだろうとの決心(?)が同時進行でした。

案ずるよりは... の例えではありませんが、私とともにシンポジウム担当をされた播磨屋先生、遠藤先生、村松予報課長は当方の実状を十分ご承知でした。札幌大会にふさわしいテーマとして選定された「都市の豪



雪シンポジウム」を盛り上げるにはどうしようか、何を狙おうか、講師にはだれを、講演内容はこんな趣旨で、時間配分は、などなどが打合せの中で具体化して行きます。講師各位にもご理解をいただき、当シンポジウムはお陰様で成功裡に終わりました。私自身も豪雪について改めて勉強させていただきました。このシンポジウムの内容は播磨屋先生のご努力で天気に掲載される運びとなっています。

シンポジウムの後に設定された懇親会も大盛況で、菊地先生のアイデアによる札幌大会らしい食品も大受けでした。また、最近では異常気象、気候変動、地球環境への関心が強まっていますが、札幌大会でもこの話題を中心にマスコミの取材が活発でした。実質の報道対応担当を村松予報課長に押しつけてしまいました。発表の特色、その内容、トピックスなどの解説を丁寧に行っていただき、この面でも好評でした。

なお、参加者を会場から呼出す方法にはもう少し工夫がいると思います。また、学会が発展するとともに、複数会場、別フロア、さらに別建物での同時進行が続くこととなりますが、他の会場の進行状況を容易に把握できるような何か良いアイデアはないのでしょうか。それから、自分のことで恐縮ですが、火山現象のリモートセンシングに興味を持つ私にとって、気象学会との係りは大変に有益です。同好の士はまだ限られています。今後ともよろしくお願いいたします。

私は昨年4月からの担当でしたが、大学、気象台の学会担当の方々には会場探し、資金のやりくりなどで大変なご苦労だったと思います。開催前、中、後の幹事の皆様の献身的な活躍には頭が下がります。準備をただけで、あえなく(?) 転勤となった方々も含め、お疲れ様でした。

## シンポジウムを担当して

播磨屋 敏 生

今回の秋季大会では、シンポジウム担当として準備委員会の段階から運営に加わり、最終的には、実行委員としてD会場の責任者、大会前日のメソ気象研究会の講演者、シンポジウム座長、スペシャルセッション「雪」の呼びかけ人代表として忙しい4日間であった。メソ気象研究会報告は「天気」4月号に印刷され、スペシャルセッション「雪」の報告は「天気」6月号に印刷予定なので、ここでは座長をつとめたシンポジウムについての感想を述べることにとどめる。

5年前の札幌での大会でもシンポジウムのテーマとしてやはり豪雪をとりあげた。しかし、その後、複数のドップラーレーダー、航空機を使った科学技術庁関係のプロジェクトが東北地方で数年にわたり、また文部省関係のプロジェクトが北海道で平成4年冬に行われた。他方、数値予報及び数値実験では、気象庁でのJSMモデルによる数値予報、またその他の人による微細格子のモデルによる研究と進歩がみられた。また札幌では、札幌総合情報センターが独自のレーダーと札幌市内50カ所に設置したマルチセンサーなどの情報をもとにした予報を営業運用することになっている事等をふまえて、豪雪をとりあげて“ここまで来た降雪の観測と予測”と副題をつけたテーマにした。各講師の方々には、実態と予報、観測(I、II)、数値実験、中小規模擾乱のまとめの話題を提供してもらった。

今回特に注意したことは、過去のシンポジウムでは各講演者に対する質疑応答のみで、シンポジウムの特徴である総合討論が十分に行われない例が多いので、そうならないようにしようということであった。シン

ポジウム前に、豪雪に係る各スケールの擾乱についての研究の現状と問題点、各擾乱の豪雪に対する位置づけ、石狩湾という地形効果等々、自分なりにまとめて準備をした。質問がとぎれた場合を考えて、あらかじめ何人かの人に質問を頼もうかとも念のために考えた。しかし、それではあまりにも座長主導型で作られたシンポジウムになる恐れがあると思い、それはしないことにした。座長がうまく話しを進行させると、自然にその時々適切な質問が出てくることを信じた。シンポジウム終了後に何人かの会員から、今回のシンポジウムは大変興味深く盛会だったとおほめの言葉を頂いたので、各講演者、討論に加わった人達へ感謝している。またシンポジウム終了後、講演者及び記録係のご協力を得て「天気」へのシンポジウム報告を早急にまとめることができた事にも感謝している。シンポジウムの内容については、各講演者による講演の要旨と討論をまとめたものが、「天気」6月号に印刷されるので、そちらにゆずることにする。

## 札幌大会を終えて

遠 藤 辰 雄

私の担当は懇親会総括と奨励金贈呈式・シンポジウムの会場係りであった。シンポジウムと懇親会は、その大会の顔であり、善し悪しが語り草となるので、決して気の抜けない重要な行事である。それだけに腕の見せ所であり、考えようによっては、やりがいのある仕事でもある。

シンポジウムの企画委（澤田、播磨屋、村松、遠藤）は今最も関心の高いものは何であるか、地方大会の場合はローカリティを強調する例が受け入れられ易いなどと話し合い、6年前の前回は私の提案で降雪に関して“どか雪”としたこともあり今回はそれでないものをと考え、一例として気候変動に関しENSOが北海道（北日本）にもたらす影響・効果を気象以外にも含めた各分野から話題を集めてみるなどが挙げられた。この関心は一致したのですが、しかし、それについて答えられる研究が出来上がっていないこと、さらにENSOと北日本の気象事象との関係は不明確であるという当時の気象庁の公式見解に整合しないことが障りとなった。そこで菊地先生が代表者で文部省科学研究費「重点領域」（都市の豪雪災害の防除と予測に関する研究）の最終年度で、まとめに早すぎはしても、次回の5年後では21世紀になり、遅すぎるの感があり、今世紀最後の御当地のお家芸である「雪」に関するテーマということで「都市の豪雪」—ここまでの降雪の観測と予測—が実行委員会承認された。講師は村松照男、上田博、藤吉康志、浅井富雄、二宮洗三の各会員であり、司会役の播磨屋敏生会員が講師との折衝、アブストラクトの印刷、シンポジウムの記録、「天気」への報告までの一切を遂行された。また、私のところの大学院生の立花義裕君のアイデアをいれて、スペシャルセッション「雪」を同時にたてることにし、シンポジウムでは時間的に含みえないもので、特に新しすぎるもの学際的なもの等のでる幕を設け、この際、全国の雪の研究者に号令を掛けることになった。これらは関係各位の尽力のおかげですべて成功裡に終わった。

札幌での懇親会は従来土地柄ビール園でジンギスカンが定番であり、それを楽しみにして札幌大会に合わせてやってくる会員もいるほどの伝統が築かれたものである。しかし、一方では着席式であるために、なかなかビジネスコミュニケーションや交流できないなどの意見もあり、今回はホテルでの立食パーティ式となった。懇親会は何と言っても料理であり何か特色をつけなければならないのであるが、この道に造形の深

い大会副委員長である恐れ多くも菊地常任理事をコンサルタントに仰ぎ、上田幹事長を先頭にしてホテル側との交渉に臨んだ。宴会担当のホテル営業マン氏曰く「刺身、寿司、そば、オードブルの順に売れて、北海道らしくと加えたジャガイモ・トウモロコシは珍しがられても、どの宴会でも必ず売れ残りますよ。」であったが、再三の検討の末、会員の若さとインテリジェンスを信じて、そばをラーメンに代えただけで、これを敢行した。結果はイモもトウモロコシもきれいに無くなり大成功であった。

シンポジウムと懇親会の会場は背中合わせの位置にあり、移動の無い分だけ時間的な余裕もあって参加者に喜ばれた。結局、参加総数は200名を越える大盛況であった。

## 事務局をあずかって

藤 山 興 二

平成4年10月7日(水)～9日(金)、標記大会が札幌市の2つの会館で開催された。

この大会は、地方では5年おきに開かれるもので、当支部は前年春から大会準備委員18名からなる委員会を組織したが、事務局をはじめとし、初体験の委員が多く、手さぐりのことに当たるが多々あり、諸関係者にご迷惑をおかけしたことと思う。

会場は、1年半も前に、札幌管区気象台に近い札幌市教育文化会館に決めたが、札幌の秋は学会・催し物のラッシュで、めばしい会館はどこも早くにふさがり、気象学会も他の機関に一步先んじられたため、全館使用は叶わず、筋向かいの北海道厚生年金会館も使うことになった。

最近の気象学会大会は研究発表が増え、今回も284件が予定されたため、従来の3会場では足りず、講演企画委員会の依頼により1会場を追加し、計4会場を確保した。

初日の受付は、会館のきまりで、早い時間の開場ができず、北海道弁でいうと、“ごったがえす”ほどの人数で、受付係だけでは捌ききれず、手近かの実行委員総動員でことに当たった。

郵便振込みによる予約者の方たちにまで、ご迷惑をかけてしまい申し訳なく思っている。できれば、参加者の皆さん全員が、「安い!、スムーズにいく」振込みによる事前予約を活用して下さればと強く思った次第である。ちなみに予約者は32%であった。

ともあれ、3日間の幕は開き、研究発表、学会各賞授与式及び受賞記念講演、シンポジウム、全国理事会及び懇親会、そして全体懇親会と目まぐるしく行事が続いた。その中からのアラカルト。

### 飲んで講演……

一日目午後のシンポジウム“都市の豪雪”—ここまできた降雪の観測と予測—は、そうそうたる先生方5人が講演を行い、かつ、議論をたたかわずとあって注目のまとであった。

講師の一人である浅井先生は、シンポジウムの限られた時間だけでは言いつくせないものがありとみえ、その日の夜の懇親会が終わってからもシンポジウム会場に戻ってビデオを使った講演を行うなど、学究に立ち向かう熱心な姿勢には感嘆した。

また、それを熱心に聴いて質疑していた会員の皆さんにも敬意を表したい。

VIPにはポケットベル……

私は大会期間中は、努めて3Fの大会事務局につめていたが、いろいろな用務が飛び込んできて、忙しい中にも張りのある3日間であった。

中でも驚いたのは、報道関係が電話をかけてきて、特定の発表者を呼び出して電話取材をしたり、会館のFAXを借りてやりとりした例である。時代とはいえ、取材方法も変わったものである。

取材に限らず、呼出し電話はご本人を探すのがひと苦労であった。

研究発表中の呼出しは出来ないので、プラカード風にして会場を回ったり、OHPで映し出したり、廊下に張り紙をしたりとあれこれ試みたが、いずれもご本人にサインが届くまでには時間がかかり、依頼者もイライラしたことと思う。

お昼の弁当は当たった？……

大会を支えてくれたのは裏方さんである。北大の学生さんを中心に、約70名の方が各セッションで、各自の仕事をしてくれた。お昼に事務局へ弁当を受取にくるのだが、最後はどうも数が合わない。つまり、弁当が足りないのだ。

前日に各係へ数を確認しているのに、どうして？……

仕方がないから、弁当の当たらなかった方々には食堂で摂ってもらい、後で精算したが料金はまちまち。中には、しっかりと力をつけた方も！。

なにはともあれ、いろいろな思い出を残し、ロング・ビック・ランは終わった。

皆さん、軽い事務局を大きな力で支えて下さり、ほんとうにありがとうございました。お陰様で、無事成功裡に終わりました。

最後に、本部浅井理事長から、慰労の意が寄せられていることをお伝えして。

雑 感

若 林 徳 司

日本気象学会1992秋季大会が10月7日から9日の3日間、札幌市教育文化会館において開催された。

受付は2名の実行委員で組織され、大会期間を通して延べ10名の応援をうけ大会運営の一翼を担うこととなった。

受付業務の大部分は大会が開催されてからが本番であることは言うまでもないが今回の大会では参加予約者については当初からネームプレートを作成準備することにした。

この作業は予約者名簿をワープロを駆使し作成していくのだが予約期日を過ぎてからも申し込みが相次ぎその都度ワープロを操作するはめになった。しかし出来上がりは上々で会場で見栄えも良く作成した者としては思わず笑みを浮かべたものである。

さて、ネームカード、懇親会カードも出来上がり、開催前日の夕方に会場に出向き、机、椅子の調達・設



管をすませ当日の受付を待つばかり、ところが翌朝は大混乱を呈したのである。

その原因は、第1に会場のオープン時間にあった。会館側の方針で開場は午前9時と決められているため受付する者と参加者が同時に入場し、準備の余裕がないままに受付を開始、その結果たちまち長蛇の列が出来てしまったのである。第2に受付個所を予約受付と当日受付更には来賓受付とに分離したのだが受付スペースが狭隘なためにそれぞれの間隔が接近しすぎ、また案内標示も手作りの小さなものであったために参加者の目に止まらなかったのである。

いづれにしてもこの混乱は事前に予想していた参加数をはるかに上廻ったことにある。当初の予想では3日間で200名の見込みであったが、その胸算用は大きく外れ360名余の参加がありうれしい誤算であった。しかもその7割が大会初日の受付ということからもその混雑ぶりがご想像いただけるものと思う。

無我夢中の3日間でしたが数々の教訓を残した大会でもあったと思います。次回の大会を行うときの参考にさせていただければと思ひ筆をとりました。

### 日本気象学会奨励金を授賞して

川野 浩

昨年の秋季大会で、日本気象学会奨励金をいただき、ありがとうございました。

私は、気象庁に入って、観測や予報の仕事を10年余り続けておりますが、毎日の仕事の中で刻々と変化する気象現象に興味は尽きません。観測の現場でも、また、予報をする上にも、経験の浅い私にとって、調査しなければならぬ事は無限にあるように思えます。これまで、日本海側の雪や道東の霧などについて、つたない調査を報告させていただいていますが、網走に転勤してからは、フェーン現象や流水などにも興味を感じています。

仕事でいろいろな地方へ転勤するので、それぞれの地域特有の現象が、書物からは得られない「実感」として感じる事ができます。また、気象観測の現業を続けているおかげで、特に努力しなくとも、興味深い現象が自然と目の前に現れてくれます。こうした理由で、私は、現業の仕事が大変気に入っています。仕事が忙しいのは、生活のため仕方がないことですが、少しでも暇を見つけて、現業に密着したテーマで調査研究を続けていくことが私の理想です。

私をもっと勤勉だったら次々と調査するところですが、これまでは忙しさにかまけてほとんど手を付けずにいました。しかし、せっかく奨励金までいただいたからには、これを励みに、少しづつでも調査をして行きたいと思っています。



## 日本気象学会奨励金をいただいて

今 勝 義

この度、日本気象学会秋季大会で、「渡島・檜山地方の天気予測の開発」の研究題目で奨励金を受ける栄誉に浴し、感激と感謝で一杯です。

研究内容は、府県予報区担当官署において入手できる数値予報資料や地上・高層解析図等を用い、地域の特性を加味した客観的な天気予報の一手法を探ったことで、「冬期の季節風型」、「しくれ」、「北高型」の天気について予報現業に取り入れるためのワークシート化を図りました。

その背景には転勤との係わりがあったと回想しています。転勤はじめは、その土地での季節感や気象特性がよく分からなく、そうこうしてようやくなにか分かりかけてきた頃に転勤、さらには同じリズムで毎年繰り返す季節やそれに伴って現れる気象現象にも、つい前年のことが忘れっぽくなることなどもあって、自分自身のためのマニュアル作りからはじまった部分がありました。

そして、これらの研究にあたっては先輩諸氏からの適切なご助言とご指導を頂き、その結果が今日の奨励金の授与につながりました。あらためて心から厚くお礼申し上げます。

## 気象学会の印象

高 橋 暢 宏

前回の札幌での気象学会全国大会が行なわれて以来の2回目の会場係をさせていただきました。前回は、私自身まだ大学4年で右も左もわからない状態だったので戸惑いも多く講演内容もあまり理解できない状態でした。今回は、その間に何度か学会での発表経験を経てきたため積極的に参加できました。今回の札幌大会では会場が前回の北大学術交流会館から札幌市教育文化会館となりちょっと勝手が違うという印象を受けました。特に、会場の配置や、設備の使用方法などについて、最初は戸惑いましたがすぐ慣れることができました。会場係としての全体的な印象は、概ね上手くいったと思えました。大会では、私が担当したA会場ではビデオを使った研究発表もありましたが、滞りなく進めることができました。会場係として不満なのは、自分の興味のある研究を聴きに行けないことですが、今回の場合は担当した会場と聴きたい会場が概ね一致したため良かったと思えます。

他の点で気がついたことでは、初日の受付時刻以前に多くの学会参加者が来ていたがそれに対応しきれなかったようでした。一方で、今回の会場数が4会場に増えたことに対する戸惑いは見られなかったようです。

また、今回のスペシャルセッションの“雪”では、総合討論の議事録を取る係をさせていただきました。忙しいもありましたが、これもよい経験となりました。

前回の札幌大会と比べて新しいことに、2、3年前から大会毎に行なわれるようになった種々の研究会があり、その内の1つのメソ気象研究会は前日に大会会場を使って行なわれ、メソ気象と雲物理に関するテーマであり、雪の話題もあって興味を持って参加できたとともに、大会の準備などの忙しさに拍車がかかったのではとも思いました。

## 若手研究者にとっての秋季大会

佐藤 晋介

毎年、春と秋に開かれる大会は、各地方にいる研究者が全国の研究者と直接会って、様々な情報交換や研究についての議論を行える数少ない機会であります。特に、地方支部が主催する秋季大会では、普段の大会には時間や旅費の関係で参加できない開催地の若手研究者、气象台の方々、関連分野の研究者にとって、最新の研究や情報を知ることのできる絶好の機会であると思われます。そのため、学会に参加する機会の少ない若手の人は、できるだけ講演を聞いて積極的に議論に参加するべきだと思います。大会の運営を担う方々にとっては、会場係や受付のアルバイトを集めることは大変なことでしょうが、このような理由で若手の学生が受付や会場係のアルバイトを断ることがあっても理解して下さるようお願いいたします。

ところで、気象学会若手会という集まりをご存知でしょうか？ これは、全国から集まった若手研究者が大会初日の夜に酒を飲みながら交流を深めるといった主旨で開かれ、参加者全員の自己紹介や研究内容の紹介も行われます。若手会といっても年齢制限があるわけではなく、自分は若手であると思っている人ならば誰でも参加できます。今回の札幌大会では日程の都合で大会初日に懇親会が行われたこともあり、若手会は大会2日目の夜に北大関係の若手が主催して開かれました。北海道の味覚が目当てという人もおり、準備したすすきのの会場には入りきれない程多くの人が集まり、活発な議論や情報交換が行われ、楽しい一時を過ごすことができました。

研究の土台となる基本的知識や専門分野外の理解が不足している若手研究者にとって、様々な研究を行っている他の研究者とのコミュニケーションは、それぞれの研究の発展や新しい研究テーマの発見に非常に役に立ちます。しかしながら、特に地方にいる研究者にとっては、そのような機会はかなり限られていると思われます。若手会も一つの良い機会ではありますが、年に2回だけのことであり大会に参加できない人もいます。また、毎年各地で開かれている夏の学校も、若手研究者にとっては非常に有意義なものがありますが、時間と費用がかかります。そこで、ここでぜひ紹介しておきたいのが、ymnet(Young Meteorologist Network)です。これは、学術ネットワークによる電子メールシステムを利用した情報交換の場で、現在100名以上のメンバーが登録しています。詳しい内容は、近々天気誌上に掲載される予定ですのでここでは省略しますが、学術ネットワークを利用できない人もNIFTY-serveやPC-vanといった商用ネットワークに加入すればymnetに参加することができます。

思いつくまま書いてきたところ、秋季大会の話題からだいぶ逸れてしまいました。最後に、若手会のますますの発展と若手研究者のより一層の活躍を願って本文を終わりたいと思います。

